

**JUSTICE  
IN  
THE ROTARY (Ⅲ)**

ロータリーの正義 (Ⅲ)

**HIGASHI-HIROSHIMA RC  
MISAO TABUCHI**

## 巻頭に際して

所謂我々ロータリアンは資本主義社会に於けるポリートイコン・ゾーオン（社会的存在）の積極的実質性を本来担保すべき責務があるはずである。ところが現実の社会に於いては自己を確信するのは困難でありむしろ自己否定に繋がりがねない。何故なら現在の社会で我々が存在意義を認められるとすればそれは一定の社会的役割を果たしている時だけである。そうして自己を抑圧すれば反動として私的思慮に埋没閉塞しあたかも本当の自分はそこにあるのだと錯覚する。そのような状況下でもう一つの担保せねばならない民主主義の問題も存するのである。現在の啓蒙的理性を根幹とする大衆性民主主義の中でさえも主観が築き上げた制度や法や道徳を維持すべき批判的理性 対話 合意すらその実質性を喪失してしまっているのである。即ち我々ロータリアンが担保すべき民主主義が形骸化すればそこでもまた各人の自閉化 私的思慮への埋没 自己不透明性を来し大衆と化してしまうのである。そこにはもう共同体主義的なお互いがお互いに責務と互惠を担保すると云う非アトミズム的思考は全く存在し得ない。存在するのは義憤無き感情論と徘徊するシャーマン 所かまわず出沒するルサンチマンの咆哮である。この様に我々

は私的自由の中でも資本主義的役割である所の疎外された生産に従事している時でも常に消費と再生産と云う資本主義の自己拡大意思に無意識に同意し参画している事になる。この状況下に於ける正義とは否応なしに経済的な判断となるであろう。それは損か得かである。その様な状況下で我々ロータリアンがこの二つの業を背負い尚且つ世界の安定と平和を目指すのであるがこの社会の合理的な構成ゆえに如何様な方策と方向性が必要であろうか。Noblesse oblige が運の道徳的忖度性に依存するものだと理解できるかどうか。我々ロータリアンにとっての批判的理性と対話に関するダイモーンの合図とは一体何なのか。これらのテーマの考察が本稿の主たる目的である。

著者しるす

本書はロータリーの正義（Ⅰ,Ⅱ）を解読した方を対象としています

（Ⅲ）ロータリズム ロータリアニズムのテアイテトス

ロータリズム ロータリアニズムのゴルギアス

ロータリズム ロータリアニズムのポレモスとエウデモス

## 目次

1) ロータリー主義とソフィスト的啓蒙思想に関して	P4-
2) ロータリー主義とエレンコス「論駁」	P10-
3) ロータリー主義に於ける対話とその構築	P20-
4) ロータリー主義とポリテーティコン・ゾーオンに関して	P29-
5) ロータリー主義の仮設性とその無基底性に関して	P35-
6) ロータリー主義に於ける対話の重要性とその意義	P45-
あしがき	P51-
References	P52-

## 1 ロータリー主義とソフィスト的啓蒙思想に関して

我々ロータリアンに関してよく「哲学」と云う言葉が使われる。それと相対し対立する言葉として「啓蒙」と云う我々が担保しないといけない民主主義と極めて連関の強い思想がある。その後両者は自然哲学と云うカテゴリーに収束してゆくのであるが（ソクラテス哲学を除いて）人間をどう云う観点から理解するかという事に関して絶対的な相違点がある。啓蒙に於いては人間を民主社会の構成員たるべく教育 教化する。その根源には人間のみがロゴス（弁論 言論）の能力を持つとする考え方があるからである。自然哲学に於いては神の知と人間の知を対比し哲学者自身が大衆と峻別し自身を神の側へ置こうとする意図が明確である。一方ソクラテス哲学に於いては「デルフォイの神託」でも明らかのように知を「人間並みの知」とし神との絶対的な対比の下でとらえ「無知の知」へと辿り着くのである。ここではソクラテスは自身を神の側へ置こうと云う考えは微塵もないのは明らかである。もう一つの相違点は両者の認識論の問題である。哲学的には「感覚」を排し真理を探究することが認識論でありそれはロゴス ノース（これらは理性と云う言葉の意味に近い）に従うと云う事でもある。対して啓蒙では主に感覚をそのまま「真理」とする

事でロゴス・ヌースの介入を頑なに拒む。哲学が要求するドクサ（臆断）の拒絶を逆に拒絶する。即ち二元論的価値対立を拒否していると思われる。この事は哲学が誇るロゴスとヌースの無基底性に支えられた特殊的・秘儀的性格による「真理」より感覺的常識的直観による「合意」のほうが有効であるとする。何故ならそれらは少なくとも対話を通じた間主観的な立場を崩していないからである。所謂価値創造的と云われる人間尺度説（ホモ・メンストラ）である。これらは言わずもがな民主制の基本形である。この様な大衆性民主主義では硬直した部族主義的・貴族主義的又はエリート主義的な従来の哲学的「正義」より新しい価値としての「規範」とか「法習」等の人間中心的な理解と認識論がより優勢となるのは必然であり所謂哲学はシャーマニズムと断罪される下地を造られてしまうのである。所謂啓蒙的合理性の社会的適合である。この様に民主制黎明期に於いてかなり有利な地歩を得ている様に見える啓蒙思想であるがこれと自然哲学との狭間に位置する所のソクラテス自身は何故この思想を見限ったのか。まず第一に恐らく啓蒙思想の中の「知の不在」を感じ取ったのではなかろうか。ロゴスを道具と見立てヌースを利用して得た合意より新しい価値を造り出そうとしている所にである。

即ちそれらを目的達成の為の手段として扱う時点で既に真の知の偽装を感じ取っていたと考えられるのである。もう一つは啓蒙思想の足元を支える所の基盤の問題である。例えば民主制は原初状態より契約を経て形成されるのであるがその契約は間主観的な場で対話議論 合意となり認証される。それは前述の様に規範 法習と価値を創造するのであるが啓蒙的合理性の性格ゆえに陳腐化と形骸化を免れない。そしてまた有効性のある新たな合意形成と云う行為に差し戻されるのである。これは換言すれば古い合意の無価値化と云う事になる。即ち古い伝統的諸価値に何の関心も示さなくなる。それは伝統 因習 習慣が道德となり神話となる様な不合理 非合理的価値観に何の関心も示さないと云う事である。合理性を目指すあまりその様な非合理的なものへの無理解が自身の土台 基盤を自壊させてゆくことになる事に気付かない。即ち自身がそれに立脚している事すら忘却しているのである。自己矛盾を更に否定しているのである。非合理的を含む現実的伝統的社会を批判する場合に於いて非合理的現実的場が批判の合理性を支えていると云う事を理解していない。この浮薄さこそが民主制を支える所の啓蒙思想の最も脆弱な部分なのであろう。もう一つ現在の世界的状況と共通する所として間主観的

な場に於いて形成した合意そのものを非合理的なものとして否定する  
アナキズム 道徳的ニヒリズムをも輩出する要素が啓蒙思想には  
本質的に内在しているのである。即ち啓蒙思想の徹底が啓蒙思想を  
否定すると云う自虐的結果となるのである。現在の民主制は本来主  
観と主観の契約と云う合理性により支えられているのであるがもは  
やその合理性を支える所の非合理的なものを忘れ去ってしまっている  
と云う事である。その忘れ去ってしまっているものこそが旧来の伝  
統であり神話的論理なのである。

現在のロータリー主義は二つの点で現在の病める民主制と同じ問題  
が存在すると思われる。一つは啓蒙的合理性の如く新たな規範（規定  
審議会によるものも含めて）が作り直されそしてやがて古くなり更  
新される毎にその有効性を喪失した合意自体はもはや価値の無いも  
のとされ忘れ去られて行く。それらは本来伝統的価値を有するはず  
でありロータリー主義の本質を内包していたはずである。我々ロー  
タリアンの共生の土台となっていたはずのものである。それらは次  
第に土台の中に埋もれて行き道徳となり神話となるのである。それ  
らは根本的には不合理なものであるがロータリー主義の共生の場を  
支えているのである。ところが現在のロータリー主義は合理性故に

それを理解していないように思われる。合理性を目指すが故に自らがそうした非合理的土台の上に立脚している事を忘れていたのである。

換言すれば現在のロータリー主義の合理性の徹底がロータリー主義そのものの本質を否定すると云う本末転倒な結果を招いているのである。それはロータリー主義の本質を理解せずその合理も非合理も自身の価値観と経験でのみ判断すると云う暴挙に出ると云う事である。その結果がロータリズムのアナーキズム そしてロータリアニズムの道徳的ニヒリズムを生じさせてしまうのである。これが現在の日本的ロータリー主義のカオス（混沌）の原因であると考えざるを得ないのである。即ちロータリー主義の真の伝統的神話と論理は本質的に連続していると云う事を全く理解していないと云う事に等値であると思われる。

もう一つはロータリー主義への誤解が生じさせている所の「知」に関する誤解である。それは端的に言えばロータリー主義を何か「人間並み以上の知」として扱う所に存すると思われる。それは連綿と無意識のように語り継がれているのでそれとは気付きにくい「Service above self」に代表されるような一見哲学的表現と思われるような文

言もその対象となり得る可能性がある。それは徹底した個人主義的  
道徳の様にも受け取れるが逆説的に考えれば無我の奉仕の後の利益  
は自身に無条件で入ってくると云う単なる資本主義的な合理性の追  
求とも受け取れるのである。これを啓蒙思想と呼ばずして何と呼べ  
ばよいのか。従ってロータリー主義に於いてよく用いられる所の他  
の標語的なセンテンスの殆どは神的でも客観的でも絶対的な知識と  
は云えない可能性が存在する。それは日本的ロータリー主義でも国  
際的ロータリー主義でも同じであるが後者はロータリー主義をそれ  
でもなお宗教的に解釈する部分が多いので単なる啓蒙思想とは言い  
切れない部分が少なからず存在するのも事実である。即ちロータリ  
ー主義の解釈と実践に於いてロゴス　ヌースを感覚的事象の改善  
又は伝統的諸価値から新しい人間的道徳的価値を創造する為に用い  
る（感覚的事象を説得して新しい価値を創造する）かどうかなのであ  
る。従ってこの部分の同意多数であれば正しく啓蒙的であると考え  
ざるを得なくなるのである。（テアイテトス）

## 2                   ロータリー主義とエレンコス「論駁」

我々ロータリアンは道徳を個人的に担保する事を半ば義務付けられているものと考えられる。個人の道徳に対する考え方は一致するはずもないが事ロータリー主義に於ける考え方としてはどの方向性を指向すべきなのか。道徳とはその本質に不合理な部分を持つ。我々ロータリアンがもし事もあろうに通俗道徳を批判し所謂ロータリー主義を「何か人間並み以上の道徳的哲学」と考えているとすればそこには内部からも外部からもそれに対するアナーキズム 道徳的ニヒリズムが生じる余地が有るのではないであろうか。道徳は社会制度に応じた差異はあり得るが我々が目指すべき共同体主義的な（所謂修正民主制）場に於いては二つの誤解されやすい理論がある。それは「自由」と「平等」に対するスタンスである。それはこの二つの民主制を支えるはずの人権的な原則に関する考え方である。即ちこの二つの要素に関しての理性理解の問題とも言い換えられる。理性を価値創造的に用いるかそれとも欲求実現のために用いる道具的な扱いをするかどうかと云う命題なのである。これらの扱いの相違点を理解しなければその場で案出される所の「道徳」は理解できないであろう。

まず第一に理性を価値創造の為に用い形成されたはずの道徳も理性

の「道具的・手段的」な理性理解解釈を基礎に於けばその場に於いて創出される所の「道德」とは原初状態では弱者のエゴイズムからなる強者の優勢を窘めるようなものとなるはずである。即ち弱者の取り分の確保を目的とした強者を抑圧する様なものが「道德」と呼ばれるのである。(ルサンチマン) 勿論所謂「道德」と呼ばれるものは何かのイデオロギー的性質を帯び又少なからず自己抑制と抑圧を伴うものであったとしてもである。本来善意思の発動である所の「道德」が何故に強者の欲望を抑圧する目的の論理への解釈に変貌するのか。そこにはお互いがお互いに責任を持つと云う共同体主義な概念ではなく自由と力のみを自体的価値(元々存在するもの)と認める「行きつく所迄行きついた」啓蒙の理論に依存するからに他ならない。そこにはもう間主観的な場に於いて裁定されたはずの規範 法習に則した自律的な生は無く最大限の欲望を満たす所の力のみが徳と幸福をもたらす様になると考えられる様になる。この様な状況は欲望と衝動を根拠とする本能的行動原理と功利主義を主体とする現在の社会的構造状況にもそのままあてはまるのは云うまでも無い事だろう。即ちその様な反社会的アナーキズムが蔓延る中では本来の「道德」は非合理的なものとして排除されるのであるがそうされればされるほど

真の価値も規範も逆に創造されなくなるのである。何故ならそこにはもう人間への信頼が無いからである。その様な社会の中では利害対立は収束不能であり理性を道具として計る結果価値創造的な合意は妥協と化してしまう。その妥協にしても際どく均衡している利害対立を解消する手段としてはただ力に頼るのみの危うさである。そこには本質的な道德はもう存在し得ない。その結果として最終的に自然状態こそに「理」の存在を見てしまう事になるのである。即ち啓蒙的合理性の徹底こそが啓蒙の中核をなす所の「合意」を反故にする方向へ向かうのである。次に啓蒙的合理主義は古い合意を非合理的なものとして自身の土台である事を忘却し云わば無基底のまま自身の合理性を主張する。この時の主張（の場）が道德の外側から行われている事に気付かない。この場における批判的合理性がもし価値創造的なものであろうとするならば道德の内部で行われるべきである。外部より道德の先天的 自明的な認識論や概念を主張するのは容易い事であり正しく理性を道具として用いている証左でもある。それでは我々ロータリアンが考えざるを得ない道德の内部に立脚すると云う事はどう云う事か。それは自身を支える所の非合理性と主観性と場の限定性の自覚から始まる。次に道德内部の非合理的な部分を

論理的に解析し整合し体系化する作業をも成さねばならない。それは正しく我々ロータリアンの道徳的真理を追究する際に要求される事項でもある。基本的に理性を道具として捉えた場合道徳で最も根本を成す所の「統一的な自己」を形成する事が出来ないであろう。それは自身の欲望と衝動の制御に関する階層構造（ヒエラルキー）が構築出来ないからである。この事からも欲望の無限拡大と云う仕方では統一的な自己は形成し得ない。それらを形成するには正義 節制と云った徳目が必要なのである。そしてそれらが幸福として理解され自己と一体化された時初めて道徳が生まれるのである。そこには論理が存在するはずであるが現実の姿は功利主義とルサンチマンが入り混じった個人主義的徳感である。その為常にその「道徳」内部（内側）に立脚した批判的理性による道徳の純化は常に自己更新として必要であろう。仮にそれがイデオロギー的であると呼ばれたとしてもである。その時初めてそれを彼岸主義と呼ぶことを逆に許されるはずである。換言すれば人はどう善く生きるかであろう。道徳を如何に価値創造的であらしめるか。そこに必要なものはそれぞれの道徳的信条をもった主観どうしの対話の合意からなる限定的な場に於ける（道徳の内部に於ける偶発的に形成された文脈が存在する）真

理と云う非客観的な結論であろう。そこにはア・プリオリな主張は存在しない。何故ならそれは道德の場の外側に立つと云う事を意味する事になるからである。又そこで行われる所の対話と論理に関してもその相違点を考察しなければ道德的真理に辿り着く事は出来ないと考えられる。対話に於いては相違点のある信念体系を持つ個々人が形成した場に於ける合意の形成を意味する対人論法であるのに対し論証では場の限定と共に仮設性（エレンコス）が要求される。それは啓蒙的合理性が不特定多数の合意をもって真理となし価値創造性を標榜するのとは極めて対照的であり又神的哲学の伝統とも概念を異とする。即ちあくまでも人間並みの知を見据えている様に思われる。しかしこの事からも合意など容易く包括する様な大きく絶対的な真理の存在が無ければ行えない絶対的な思考論理が在る様に考えられる。（エレンコス；ある道德的命題 A を論駁する為に別の道德的命題 B C ... に関して合意する。そうして B C... から A の反証を導き出すことを云う。但しこれはあくまでも違う信念体系を持つ主観が形成する場の中に於けるお互いの合意と考えるべきである。何故なら論証の過程で認めないのはその人の人間性に於いて「恥」である様な命題を必ず仕込むからである。しかし多くの場合自身の道德的信

念体系に不整合が無い場合は殆どないと考えるべきである。たとえ相手がソクラテスであろうと。詳細は成書を参照) 次にこの様な方法論で推し量るべき事柄とは一体何かと云う事である。恐らくは主観のある所の人間性の評定を含んでいる。その場その場で特殊的事情の場に於ける人間性の評価はその人の言葉と行いの一致が達成されているかどうかと云う事案も必ず含まれるはずである。何度も試されるべき対話の事案即ち信念と信念の突合せからなる合意はいずれ究極には人間の道徳的本性をも明らかにするであろう。しかしこれとても普遍的な道徳的真理の存在を示唆するものではないし何回合意を繰り返してもその存在を確定するものでは決してない。事実は全く逆であろう。即ち言葉と行いの一致がロゴス（理性）により拘束されうる状態が担保され得るときその時のみ道徳的真理は存在する。

（理性的動物）これは主として正 不正 善と悪に関する感覚の問題と云えよう。そしてこの事は人間の本性を推し量っているとも言える。それは主観を持った個々人の対話に於ける実存的な場に於ける合意のある意味相対化であり普遍化と云う意味合いを併せ持つようになる。（普遍的真理）この事が不特定多数の合意からなる一般化され抽象化された啓蒙的合理性とは全く過程も結果も「言葉と行

いの分離」と云う惨憺たる構造に落ち着く。

（この事は我々ロータリアンが普段聞きなれている所の「個人主義的徳」の礎となっている事に気付かなければならない。ロータリアン個々人の対話からなる合意の相対化こそが最も重要な真理となり得る可能性があるのである。誰しも自身の道徳的信念体系に矛盾を抱えているはずである。それを個々人同士の「対話」により矛盾を暴きその不整合性を論理的に解明する事が本質的な道徳の混沌を正して行く唯一の方法であろう。その事を我々ロータリアンの先達は知り得ていた。だからこそ *The Rotarian* 等における個々人に向けた対話を甚だ惹起する所の文献が存在する（した）のであろう。現在の日本化された状況下に於ける「ロータリーの友」ではその期待は更に厳しいと云わざるを得ない。何故なら本邦ではロータリー主義の本質を理解するものが極めて僅少で尚且つ彼らは諦観から成る自閉をしまっているからである。最大の理由が啓蒙的論理と功利主義と云うロータリー主義の内では基本あってはならぬ理論がまかり通る下地が出来てしまっているからである。彼らは日々意に反した必然に窮し最終的に希望の無い選択を強いられるのである。この事は特別に現在のロータリー共同体が逆境とか紛争状態にあるわけでも

ないに関わらずである。もしその様な状況であれば人間の本性として現実に気質を同化させると云うのはかろうじてまだ理解可能であろう。しかしその様な状況でないのであれば現状に同意することは自律的な生と意思を放棄している事となり「沈黙している」彼らもまた必然的に責められるべき存在となり得るのである。(筆者注：ロータリーの日本化に関してはロータリーの正義Ⅱ参照の事)

次に啓蒙的合理性でも自然哲学でもソクラテスのロゴスに於いてもそれが立脚している所の合理性とロゴスに基底（自らが自らを釈明可能である事）が有るかどうかと云う問題がある。(ヘラクレイトスに於いてはロゴスの無基底性から引き起こされる存在不安) それはソクラテス自身が告白する所の「無知」に関してである。無条件的真理とは何かと云う問題であろう。それに彼は到達していないと云う理由は所謂我々が捻出す所の人間並みの知恵に関する価値の無さに起因すると思われる。その為に道徳的合理性に関してどうロゴスを理解すべきか考察が必要である。前述の様に自然哲学ではロゴスを自体存在的(アトミズム)に扱いそして啓蒙的合理性に於いても価値と真理を創造する根拠(基底)を不特定多数の合意の形成と云うただそれだけで自体存在的に扱うのである。この様なアトミズム的思

考は結局の所所謂ドグマでしかないであろう。問題は支持すべき合理性を支える所の無基底性を自覚し得るかどうかであろう。ソクラテスの合理性は基本的に人間本性への信頼からなる実存的な場に於ける対話と云う手段を通じてのみ得られる合意と云う「無知」を自覚出来るかどうかを基本にしている。人間の意識と理解では道徳的な合意を成立させる真の根拠を示せない。(真の知者は神であると仮定して) その上で間主観的な対話に於いて合意に達する事を神秘的と呼ぶのはある意味差し支えない様に思われる。そこにはソクラテス自身の人間性への限りない信頼が有る事は自明であろう。それらは前述の様に対話と云う限定的で縮減された実存的な場に於けるエレンコスの実践を通じてのみ実証されるのである。その意味に於いて哲学的ロゴスは限定性から解放された道徳の真理(パイドンに於けるプラトンの方法論的命題である)を目指すのではないか。たとえそれが「無知」であってもである。

我々ロータリアンが日々個人主義的道徳観に鑑みて行動するときそこに果たしてエレンコスは存在するのだろうか。単なる臆断 ドグマになってはいないだろうか。その問を発するのが憚られる程に現在窮しているロータリアンが少なからず存在することを逆に期待し

たい。

### 3                   ロータリー主義に於ける対話とその構築

我々ロータリアンが個人主義的道德の成れの果てと云われない様に

する為には現実の（何時の時代に於いても）合理的社会制度支配と自身の自閉性を共に打開する必要がある様に思われる。それはとりもなおさず我々はロータリアンである以前に一市民であるからである。意見の不一致を共通的なロゴス（言語）と対話（理性的議論）により不毛な対立にならない様にし破壊的な価値観を創造しない様にする事が必要であろう。それに伴い必要な事は我々ロータリアンが目指す所の所謂「道徳」と云うものは現在の世に於いてどれ程の影響力と存在価値があるのかを理解する事であろう。もし道徳が対話により価値創造性を持つ様になるとすれば対話により明らかにされる所の不一致と云う問題を考察する必要がある。考えの不一致は事実に関する不一致 態度の不一致は価値に関しての不一致とされる。道徳的な問題に関しては後者であり「理性」によつての解決（評価）は困難とされる。この事は理性の機能外とされる。理性の機能はあくまで事実認識 目的に対する手段の設定 論理問題の整合性に関する問題等に限られる。但し事実認識が完全に態度即ち道徳的価値から完全に分離できるかと云うとそうではないであろう。ならば理性は何故に価値評価に於ける議論に関して無力なのかを考えねばならない。一つは当然理性の価値創造性に関する疑問であろう。それは根本に

存する所のロゴスの本質的無基底性の忘却に関する問題（ヌースとでも同じく忘却する）であり客観性と普遍妥当性を無条件で標榜する事への抵抗でもあろう。これは自然哲学とアトミズムへの呪縛である。ヘラクレイトスだけは自身の託宣たるロゴスの無基底性にまつわる存在不安だけは自身の常なる自己否定 不断の自己更新に依ってのみかろうじて均衡を保てるとする。ロゴス ヌースは従来の神の託宣による呪術的な世界解釈に代わる創造性を有する世界解釈能力である。そこには自身の存在不安など無く有るのは確固たる自己正当性であり創造主としての自負を見て取る事が出来るのである。この事は大衆側からすれば哲学に対しエリート的 特権的 秘密主義的等と認識するに相応しい言質を与えるにも関わらずである。即ち自然哲学のロゴス（ヘラクレイトス哲学ではない）は自身の存在を既に自体存在的（アトミズム）に捉え始めてしまった事が価値創造性喪失の一番の要因と考えられるのである。この事は自然哲学自身の存在の構造を問う方向性を持たなくなる事を意味している。そして自体・自律的に存在すると考えられる対象に関する事物的存在（アトミズム）をロゴスは論じる事になってしまうのでありパリメニデスの想い（ヌース）とは裏腹の「現象の救済」へと向かうのである。そ

れにはもう一つ理由がある。ソフィスト的啓蒙の台頭である。プロタゴラスらの「人間尺度説」は貴族的なロゴスに対する民主的なドクサの開放を目指したのである。特権階級の考えではなく人々の合意こそが真理とする。これに対し自然哲学はドクサこそ感覚に立脚した非合理で特殊なものと反論し自己の普遍性 客観性を主張する。これは逆説的に自身の特権的な立場の放棄を意味する。元来自然哲学は情念を否定し日常的世界観を否定して二元論的な世界観を構築していたがそれにより価値創造性を喪失したのである。それ故にアトミズムの台頭を許容し理性は形式的な「道具」と成る。そこにはもう本来の「知」と呼べるものは存在し得ない。それは現在の「知」の状況と全く同一なのである。これは我々ロータリズム ロータリアニズムの成立要件である所の資本主義と融合した民衆支配性民主制の体制化とも連関して考えるべきである。元来我々ロータリアンの礎となる資本主義と民主制に於ける大衆支配体制では表面的にはロゴス重視裏面に於いてはソフィスト的啓蒙と功利主義的側面を持っており即ち二面性を持つダブルスタンダードなのである。この事はロータリー主義の黎明期でも現在に於いても皮肉なことに明確に貫かれている唯一の事柄なのである。(その他のロータリー主義の理念に

関する理論は前述の「数」の理論により歪められ曲解され誤解され衰退してゆくのであるがこの事は本家より「日本化」が推し進められている我が国に於いて一層著しいのは明白である）所謂現在のロータリー主義に於ける「理性」はこの現実を追認するだけで価値創造性も乏しく去勢化されている様に考えられその実践理性にしても自然的理性にしてもすでに「道具」と化している。それに加えてロータリー主義の内部に於いても非認知主義が蔓延り事もあろうに情動主義への回帰を行っているのである。それは「知 智 理性」主義とは対極をなしいずれ道徳的ニヒリズムとアナキズムを生じさせる事となるのである。それは我々内部での価値創造的な対話の否定を意味するのであり逆説的な意味で今後予見出来得る力や強制による対立の解消を自身が価値創造的でないと否定した所の「知や理性」に最終的には求める事となるのである。従いいくら感覚による合意を重視しても結局は知や理性の形式的整合性や統制力に最終的には依存すると云う事である。換言すれば我々ロータリアンの内部に於いても自身の感覚と経験値のみに依存する考え方は最終的にロゴスに従るのであるが実際にはその様な状況に現時点では至ってないと思われる。何故なら正しい方向性の理論を持つ人数が極めて少なく且つ彼

らは現状の大衆的ロータリー主義解釈に関しての諦観から自閉と私  
的思慮に埋没し自律的な行動を行う所の意欲を喪失していると推察  
出来るからである。即ち彼らが仮に重い口を開いてロータリー理論  
の客観化と普遍化を図ろうとしても予期するほどの実践的な力を持  
ちえない。更に一時は持ちえた指図的な力の回復を求めてもう一度  
それらの価値創造性と主体性を標榜したとしても恐らくは空論化し  
結局は彼岸的世界 形而上学的世界に逃避せざるを得なくなるであ  
ろう。彼らがようやく重い腰を上げたにも関わらずである。現在の日  
本化されたロータリー主義解釈がどれだけ大衆的で啓蒙的合理性で  
構成されているか。且つ功利主義的判断基準がその基本となってい  
る事を考えるとむべなるかなである。正しく小乗仏教から大乘仏教  
への変遷そのままである。

何故にロータリー主義に於ける道徳解釈がこの様な功利主義的道徳  
(自己への固執・閉塞を基本とする) 主体になってしまったのか。

その一つに現代社会の抱える意図的とも思える多様性保全傾向があ  
る。それを支え且つ我々を呪縛しているものに社会契約論 義務論  
等のアトミズム的思考からなる様々な制約とその制度が存在するか  
らである。我々ロータリアンはそれである以前に一市民である。それ

も社会的な役割（ペルソナ）を担い社会的存在（ポリージェン・ゾーン）としてその責を負う。他者との関りに於いても役割と役割として相互依存的でありその際には必然的に「対話」が要求される。対話によってなされる議論は関心の共有から始まる。立言は理由と根拠を必要としお互いの立言の重なり合いから多くの場合価値創造的な対話が成立する。しかしそれが為されない場合感情対立が生じる。その原因の多くは各々が全く異なる関心と立言の場を持っている事があげられる。それに加え各々が理性的であればあるほど感情対立は一層顕著になる。その理由は各々立言の場が特殊的・限定的である事の自覚の欠如でありそれによりお互いが自身の正当性と普遍性を主張し始めるのである。最終的には対話そのものの否定と自己閉塞に終息する。これらは利害対立が障害となり理性的議論が妨げられていると解釈され更に利害関心を放棄し譲歩し自我の抑制が正しいかの如き「道徳」が持ち出される。しかしこの道徳は大難を排し小難を受け入れる（利害関心の放棄は他の利害関心への執着そのものである）と云う「交換」を意味しそれは正に自己への執着・固執・閉塞（社会的存在からの疎外）そのものと云える。この様な道徳が現在の主流を成す所の「功利主義的道徳」の本質である。即ち数値定量化・

等質化（アトミズム即ち理性の道具化）の原理である。換言すれば数の大小が道徳的問題の根本とされるのであり人間の本質的な内面の「差」は考慮されない。我々ロータリアンはこの数値化されない部分の本質的内面に関する奉仕を連綿と行ってきたのは間違いのない事実であろう。我々は商取引の手練手管に関する道徳をロゴスとして来た訳では無いのであり数値化と等質化を推し進めて現在の大衆民主主義のバックボーンたる管理・統制の後押しを担ってきた訳では無いはずである。しかし前述した様にロータリー主義そのものは民主主義と資本主義を一体で捉えてその護持・保全を最初の前提にしている主義・思想である。そうするとこのアトミズム関連事項は我々ロータリアンにアンビバレンツを惹起する所の悩ましい問題となり得るのである。何故ならこの社会的役割さえ果たしていれば自身の他者からの内的精神への干渉は防げるからで（逆もあり得る）ありそう云う正義と自由をその道徳は保証してしまうからである。（幻想的な私的思慮への埋没を自由と考えてしまう事であり本当は自身が不透明となっているのにも関わらずである）現在の日本化されたロータリー主義解釈では更なる悲劇が起こる。それはその保守的で現状肯定的な理性の扱いであり理性的言表はもはや情動的であるどころ

か去勢され現状甘受の為の道具として使用されている有様である。さらに悪いことに自身の理性と道徳的論理がイデオロギー化している事に気付かない。それどころか自身の正当性・普遍性・客観性を頑なに信じるが故に自身に対する批判・不信等に対する理解力を喪失し逆にその批判を不遜なイデオロギーとして捉えてしまうと云う恐るべき過ちを犯してしまうのである。

この様なアトミズム的ロータリー主義解釈(功利主義的道德)は基本的に「対話」を拒否し現状肯定に執着し自己閉塞した正しくホイ・ポールロイの生のあり方そのものとも云えるのである。それは自身の虚と実の存在構造(アトミズム)に関する動的関係が理解できず都合の良い(合理的な)部分を全体像と思い込む事(私的思慮)である。我々ロータリアンが本来の虚と実の二元論の呪縛から解放されるためにはやはり反アトミズム的思考をせざるを得ないだろう。たゆまぬ自己否定・自己更新での私的思慮からの脱却を目指して。その時初めて現代のアトミズム的思考にまみれた道德論・社会哲学から解き放たれて本来の意味のポリティコン・ゾーオンとなり得るのである。その為には自己の立言や利害関心の特殊性(限定的且つ限定的)を自覚し言葉があくまで文脈依存性である事を確認した上で初めて「対話」

がもたらされると云う事を主観性の自覚と云う観点で理解すべきであろう。この様な態度が所謂「無知の自覚」と云えるのである。(反対の態度が「ドクサ」であり思い込みの知である。そこに在るのは自己閉塞とその中での安息である。) 無知の自覚が成し得れば対話に於ける調整・交換ではない意味のある「対立」を特定する事が出来る。それが成されればその場に於ける立言は自己そのものとなり手段的性格から理性的性格へと実存的関係を構築できる性格へと昇華するのである。その様な「対話」が可能な「場」に於いて我々の自己は自己でありうる。その内実こそがポリータイクン・ゾーオンの意味する所であろう。我々ロータリアンが「ドクサ」に守られた「意味のない奉仕」を選択しない様にする為にはこの様な開かれた魂を持ち対話に耐えうる理論を持たなければならないし又それは自明な事であろう。現在の日本化されたロータリー主義でそれが為されているかどうかの判断も実存的関係が構築できる対話により為され判定されるべきであろう。何故なら我々ロータリアンは既にロータリー主義と云う関心の共有の場にいるのであるから。

#### 4 ロータリー主義とポリータイクン・ゾーオンに関して

A.F.Sheldon は数々の著作を有するがその本質は功利主義的徳の

完全遂行と考えざるを得ない要素が存在するのは事実である。奉仕する事は最終的に自身が益する為の行為でありそれは半ば意図的に理性を道具として目的論的に用いて行為する事を本懐としている。いくら彼がその事を否定しようと彼の文章と行間から滲む本質からカントの云う所の善意志なるものは微塵も感じられない。それは定言命法ではなく仮言命法だからである。具体的には Sheldon 自身の回顧録である所の一文に集約される。

**He profits most who serves best** (旧 現在は **One-** である) この件に関して彼は申し訳程度に且つ取り繕うようにこう述べている。

「この内容に関しては物質的に報われると云う事だけでは不十分であり精神的にも充足する事を付け加えたい」(筆者訳)

もはやこの時点で彼は奉仕を自身が益する事のみならず(目的論即ち仮言命法)奉仕の相手方を自身の精神的充足(喜び)の為の「道具」として用いている(理性を道具として用いている事)のである。

彼はこの事の欺瞞に気付いているにも関わらず素知らぬふりを貫くのである。それが黎明期のロータリー主義の為なのか大衆的民主主義と資本主義の確立の為なのか既に理解しているのも関わらずである。従って彼は三つの大罪を犯している事になるのである。この件と

ロータリー主義解釈に於ける日本化に関しては当時の時代精神 時代背景等考慮すべき点はあるがそれを差し引いたとしても現時点の判断では肯定する要素は多くないと考える。

我々ロータリアンの方向性は何時どこで狂い始めたのか。

大衆民主主義と資本主義をどこまでも支持しないといけないのか。

ソフィスト的啓蒙の人間中心主義としての「人間尺度説」を支持するのか。

「ロゴスの哲学」を完全放棄するのか。

それでは逆に反デモクラティック（哲人王制：これは勿論プラトンの本懐ではない。魂の目覚めを市民に惹起する為のレトリックである…後述）を目指すのか。

我々ロータリアンは奉仕と道徳を取り仕切る所の「一つの共通的な世界」を目指しているはずである。それを「ロゴス」と呼ぶのならそれは「たたかい」でありたゆまぬ自己否定と自己更新からなる存在の構造であるとも云える。これを受けて各々の時代の閉塞性を打ち破る事がロータリー主義解釈の一部であろう。

ポリーティコン・ゾーオンを社会的存在（自由な個々人が理性的議論を経て形成した同意の下共生する）と呼ぶならばそれは理性的・ロゴ

的存在とも言い換えられる。それを下支えするのは所謂神学的哲学よりもソフィスト的啓蒙思想である。同意を形成する弁論能力の涵養・人間中心主義（人間尺度説：規範の再議論と再更新で人間に対して相対化する）により大衆的な「ドクサ」を哲学的な「ロゴス」より重視した。我々ロータリアンが支持する所の民主制は本当にソフィスト的啓蒙思想に身を委ねて良いのかを問う必要があるだろう。それは人権・自然権・市民権等と呼ばれる自体存在扱いされる所の近代民主制の基本要素に関しても同様である。所謂民主制の自由・平等と云う基本原理は誰の為のイデオロギーかと云う事である。本来の意味とは逆に多様性の元差別化された個々人が自閉性の虜になるが（ペルソナ：役割として）しかしこの状態に依存しなければ個々人が存立し得ないとも言えるのである。換言すれば自由・平等と云う理念は資本家・支配者層の絶対的優位性の持続の為にあるのではないかと云う事である。勿論個々人が自閉化しなければこの優位性は崩れる可能性はある。この様に民主制の維持には個々人の自律的な働きかけが必要なのであるが古代一近代共に理念は形骸化し個々人は自閉化を始め私的思慮に埋没する。即ち哲学的ロゴスを中心とした神話的人間存在の虚構性を攻撃し始めるのである。これは客観性（ロゴ

ス)より主観性(ドクサ)を重視した思想であり理性的な道徳に対しても攻撃してゆく。この様に民主制はある意味人間個々人の存在様態 制度自体の理念と現実の乖離は覚悟しておかねばならないであろう。

我々ロータリアンはそれでもなお民主制の保持に奉仕と云う所の道徳的観念で対峙してゆかねばならないのであろう。我々が求める所の真理とは何を正義とするべきなのか。それは又何故なのか。その答えに近似するものが恐らくソクラテス的正義即ち「ロゴス」に忠実に自律的な生を送る事であらう。批判的理性と対話(論駁)による民主制の復活には真に価値のあるもの(≠大衆的生)とは何かと云う間は不可欠でありアラゲーによる道徳的解決ではない。正義を名目化している原因はことばと行いの一致の欠如でありこれが為に民主制は形骸化せざるを得ないのである。形骸化する為に欠かせないのが個々人の役割(ペルソナ)への還元とそれに伴う自閉化 私的思慮への埋没への促しである。そしてその中が自由であると錯覚させる事で民主制を形成する国家が如何に自由で自然かを強調する。

お互いがお互いに干渉せず自身の役割に専従する事(相互補助)が最も合理的であり民主性国家の有機的一体性の確保に如何に役立つか

を刷り込む事である。そうすれば支配階級と被支配階級の軋轢は避けられ階級制度は永劫のものとなる。これこそが知者支配であり現代に通ずる所の官僚・技術知支配制であろう。その中で個々人は自己不透明性の大衆（アトム化したホイ・ポルロイ）となり改めて法と制度への服従を誓わされるのである。そうする事が「正義」であると導かれるのである。これがプラトンの挑発でありこの意図を読み取り我々ロータリアンは価値創造的な対話と魂の開放（自閉からの覚醒）を目指さねばならないのである。（「魂の世話」「無知の知」）

個々人が自閉化している場合（その自覚の有無関わらず）逸脱してしまいがちな世界では各々が自律的な生を送っていると錯覚する。

求めるものは富 名誉 権勢等でありこれらの獲得の為に理性を道具として用いながらも自身は合理的な生を送っていると思ひ込む。

この自己への限りない執着と閉塞感を私的思慮に埋没すると云う。

それは非在への傾向性を持ち「ロゴス」と云う共通的世界から遠ざかり見えなくなる（見ようとしな）状態である。自己否定と自己更新を繰り返す乾いた魂の存在し得ない世界である。これが現実近似した世界であるとする事を否定するのは困難であろう。我々ロータリアンが求めるものはたゆまぬ自己否定と自己更新を繰り返し魂を

開放して共通的な真理である所の「ロゴス」に従う事であろう。

この運動性こそが「たたかい」と云う求むべき「存在の構造」である事は明白であろう。エフィソスの時代から現代に通ずるこの様な理論を提唱したヘラクレイトス哲学を理解しなければ我々が求める所である道德の「存在の構造」解明は不可能である所以である。

現代に生きる我々ロータリアンはこの方向性を保持出来ているのか。言葉と行いの一致と云う事に関して。

彼も古から述べている。

多くの人はロゴスに関して 「無理解である」(Fr.1) と。

## 5 ロータリー主義の仮設性とその無基底性に関して

ロータリー主義にはその解釈に於いてその時点での知識や理解度の

みならずそれを受け入れ可能な資質の有無という大前提が存在する。ロータリー主義の本質は決して生と死の狭間とか虚無の深淵に浮遊するものではないがその理解にはアトミズム的思考では不可能な要素が多い。それ自体の自体存在は無く（非アトミズム）存在の構造に関しては必然的に常なる「たたかい」が必要と云う事である。即ちそれを担保する能動的な意思は常に非在に流されやすく（傾向性）在へと引き上げようとするたたかいを通じてのみかろうじて存在にあずかれるのである。その為ロータリー主義の理解度に比例してそれ自体の存在不安が深まる（無基底・無根拠）と云うアンビバレンツに悩まされる事となる。この事は今に始まったわけではなく古代より連綿と引き継がれている性質のものである。我々ロータリアンがその魂の求めにより善悪・正不正・醜美等の判断を下す時に何を基準にすべきかと云う問題なのである。又それは本来のロータリー（道徳）主義に必要なものは何かと云う問でもある。その為に古代より連綿と引き継がれている所の判断とその論証の方法論について「魂の不死証明」と云うテーマで比較して考察する。（プラトン）

#### 1) 古代ギリシア（ヘラクレイトス：ロゴス＝ポレモス思想）

基本的に自身の知を大衆のドクサから峻別し人と神の知を比較した

場合自身を神の側に置こうとする。そこには自身の無基底性からくる存在不安が常に有りロゴスはその存在理由を持たない。常なる「たかひ」 不断の自己更新を必要とし純粋な非アトミズムである。

宇宙的ロゴス＝哲学的ロゴス（後述）

## 2) 神的ロゴス（ミュートス：物語 神話との連続性） 関連

ロゴスとミュートスの係りに於いて浮上するのが信仰と神話的哲学である。霊魂（魂）を物質主義（アトミズム）で捉えるか否かと云う問でも顕著となるのが自然学的合理性（自然学的ロゴス）との対照である。このロゴスの於いては事案・事物についてそれがそのまま無条件に実態（存在）すると云う前提に立つ（だから神話なのであるが）為自身の論理的枠組みについて全く無自覚・無反省となり従い無基底性となる。

例) パリンゲネシア<反対物から反対物の生成>..「パイドン」

「魂はこの地からかの地に赴き後又再びこの地へとやってきて死者たちから生れ出る」

生者から死者への一方向では全てが死に絶えるのでその反対方向もなければならぬとする事（ハデスの国への魂の移動・魂の不死証明に関して..）

この様な神話的で論証の構造を構築できない内容へと帰結する。

同様の事は以下でも起こり得る。

例) 学習想起説..「パイドン」 プラトン 69Eー

我々の魂は今宿っている所の人間の形態に存する以前に（何処かに存在して）学んでしまっている事柄が無ければ今現在学習してそれが何であるかを「想起」する事が出来ない。従って魂は不死である。

この両者とも仮設性とも云うべき前提条件が必要なのは明らかである。ここで云う所の仮設性の問題はそのままイデア論へと直結するのであるがソクラテスの 99E5-6,並びに 100A3-7 を参照する。

「ロゴスへ逃れてその中に於いて事物の真理の考察を行う」

普段我々は日常的思考に於いて原子論（アトミズム）へ行き着く所の自然学的ロゴスを基準にしているがそれは所謂「感覚」的思考でありロゴスとは正反対のものである。（筆者注：物質主義的思考）

「各々の事象に最も強いと私自身が判断するロゴスを仮説として立ててそれに調和すると思われる事柄を真であると置き調和しないと  
思われる事を真でないと置く」

信仰と神話的哲学に対抗する形で自然学的ロゴス（合理性）は登場してきたのであるが連続性を考えるならば神話と自然学的ロゴス（合

理性) の間に存在し感覚の直截性を排する様態が適切と考えられる。それはこの様な「仮説」の方法 (イデア論) である。その点 (論証) に於いて啓蒙的合理性は不適切なのは云うまでもない。

(筆者注)

「純粹理性に純粹な存在が現れる」これは肉体的生と自閉化からの脱却 (死の練習) により真と智の獲得を経て真の徳を目指す事を意味する。この点に於いて肉体から離れた (魂と呼ぼうか) 純粹な理性が独立して存在するかどうかである。存在する (しているべきだ) とするのが「信仰」であろう。「死の練習」に於いて既に哲学とは自己矛盾的であるし自身の存在と哲学自身に関しての無基底性 (存在を支持する論理の無さ) 更に存在不安に気付いている。それらはヘラクレイトス哲学による「不断の自己更新」「自閉からの脱却」と云う共通的なもの (ロゴス) に従う事により哲学と自己はドグマ化を脱し存立可能性が明確になってくるのである。「魂の不死証明」なるものは結局の所哲学的ロゴスの存立可能性を証明する為になされたものであり科学物理的な魂の存在形態を論証する為のものではないのは云うまでも無い。哲学が倒錯・虚妄で無い事が示されるべきその為になされたのである。

啓蒙的合理性も自然学的合理性に関しても自身の無基底性（存在不安）を論じることなく自体存在（アトミズム-物質主義）に拘りながら「魂の不死証明」を論ずる事自体がロゴス（共通的なもの）の不在を逆照してしまうのである。又それらが否定する所の「神話との連続性」をも忘却している事も無基底性に通じるのであろう。しかし彼らは云う。

哲学とは死への恐怖を来世（魂の不死なども含めて）と云う物語（神話）により教説する所の倒錯ではないかと。

現世に於いては肉体が魂を支配するのであり魂を肉体より神的（上位）に捉えなければならぬいわれはない。

哲学が妄想でないと言う事は魂の不死証明が為されてある事に依存するがその証明を行うのはほかならぬ「哲学」ではないか。

これらが神話と連続する哲学的ロゴスに対する自然学的ロゴス（現代的アトミズム）からの反論の代表である。

＜これに対し哲学的ロゴスは「論証」と仮設（イデア論）による反論を論駁により行いその存在可能性を明らかにするのである。＞

### 3) イデア論（仮説）と自然学的ロゴスの対比に関して

哲学的ロゴスの存在を規定する仮設がイデア論である。イデアはそ

の存在に関してそれぞれに対応して個々にあると仮定される。これらは哲学的ロゴスの存在を自然学的ロゴスに対比して規定する所の自身の論理構造であり数物理に於ける定義に該当するものである。更に論証に於いては無基底性と（特殊な）場の限定性を自覚した上での相対化が必要となる。自然学的ロゴスの様な自身の無基底性に関しての無頓着・安易な普遍性と絶対化を謳う盲信化では論理的必然性は担保できない。哲学的ロゴスの論証では己の分限と各自の合意が重要でありロゴス成立の場の限定性を自覚する事無しには成し得ない。これらが哲学的ロゴスの概念的自己規定である。(95E)

日常的判断は自然学的ロゴス（合理性）に溢れ事物を感覚的にしか捉えない。その対極を成すロゴスの中で事物の真理を考察するのが哲学的ロゴスである。(99E5-6) プラトンは論証を仮説から導出されたものでありその仮設性が限定された場の自覚と共に認識されている（ある）事が重要と考える。即ち「対話」の成立要件と完全に同一でありソクラテスのエレンコス（論駁）へと通じるのである。対してアリストテレスは論証の前提が明らかか若しくは明らかなもの「アラゲー」から演繹されたものでなければならないとする。従いこの時点でも神話的哲学（ロゴス）とは袂を分かつ。

イデア論は哲学的ロゴスの自然学的ロゴス（合理性）との比較に於ける論理的構造分析による「変化に関する存在論≠原子論、アトミズム）であるがイデア・内在性質・イデアを分有し内在性質を持つ事物に三区別される。（102A10-103C9）

イデアと事物の変化に関する存在論とも換言出来るが要約すれば

- 1) イデアは捉えた事物に内在性質を帯びさせるが反対のイデアにはなる事は無い。内在性質も反対にはならない。
- 2) 事物（イデア、内在性質）は一定の性質を持ち他の事物に対してその性質を帯びさせる。
- 3) しかし事物（イデア、内在性質）は反対の性質を受け入れるとその事物（イデア、内在性質）は退くか滅びるかである。

即ち事物（イデア、内在性質）は他のものにそれを与えるが反対に受け取る事は不可能なのである。従い「魂の不死証明」は

魂は生と云う性質-肉体に生と云う性質を帯びさせる-反対の性質である死を受け入れない-退くか滅びるか-反対のイデア（死）とはならない-従い「魂は不死＝不滅」である ...哲学的ロゴスの存在論

となる。勿論この論証は哲学的ロゴスの存在論的实际解釈であり物理学的（量子力学的）な科学的証明と無関係なのは云うまでも無い。

この様に無基底性ではあるが仮設要件を整えば哲学的ロゴスのみが存在可能となり得るのである。(仮説を上位に上昇する：善原因説)  
これが哲学である。果たして我々ロータリアンの幾人がこのロゴスを知り得ていてこのロータリー「哲学」と云うことば(ロゴス)を用いているのであろうか。更にこの哲学的ロゴスは仮設に基づく自身の論理構造を明確に認識しているのであり「どこまでも」その論理に従うのである。その論証の中で場と自己の限定性・特殊性を自覚しあくまでも無制約性・普遍化を排除している。何故ならそうしなければ自らを「神話」としてしまうからである。

我々ロータリアンが暗黙の了解である所の民主主義・資本主義の担保を前提として「奉仕」を考える場合に生ずるアンビバレンツに関してどう対処すべきなのか。勿論これは現実社会を席卷する自然学的ロゴス(合理性)にそれと対極をなす「哲学的ロゴス」で奉仕を考えるという事を指す。即ちアトミズムと非アトミズムとの判断に於ける葛藤の中で非アトミズム的思考を選択することが如何に困難で能動的な努力を必要とするかと云う事とも換言出来る。

仮にそれを成し得たとしても次の疑問が生ずるべきである。

それはロータリー主義の存在不安に関する批判的理性である。

我々ロータリアンは何故奉仕をしないとイケないのか。

(これは自然学的合理性により発せられる問である。以下同じ)

奉仕と云うたたかいをしなければそれは「自閉」を意味するから。

では何故「自閉＝死」を拒絶し「生」を目指さないといけないのか。

日々の奉仕を拒絶し安楽を目指す事が死を意味するにしても何故そ

うして死んではならないのか。その様な死を恐れるのはロータリア

ン(哲学者)と云う自意識過剰の倒錯者だけではないのか。死と云う

非在への傾向性に流され現世の事実を受け入れる事が出来ないだけ

の事ではないのか。だから安楽を恐れ倒錯の哲学に身を投じてそこ

から一步も動こうとしないのではないのか。アンビバレンツを自己欺

瞞でしのぎ神話からの連続性に依存するだけの無基底性極まれる虚

妄行為者ではないのか。ロータリアンでなくなるよりもロータリア

ンであり続ける事の方が根源的な不安の原因ではないのか。

前述(純粋な理性に純粋な存在が現れる-)の様に我々ロータリアン

がもし純粋な理性を目指すとするれば肉体と云う基底を喪失すると云

う自己否定・自己矛盾そのものとなる。(死の練習)

真のロータリアンへの道程はそれらを乗り越えて行かねばならない。

それはロータリー主義(哲学的ロゴス)の存在の構造を自身で示す事

であり非アトミズム・論駁（エレンコス）による対話・アイデア論（仮説）を理解並びに実践する事でもある。

それは「共通的なもの」を認識・実践に移す事他ならないのである。

言い換えれば我々のロータリー主義のロゴスを「共通的なもの」に再定位する事でもある。（筆者注：純粹理性）

## 6      ロータリー主義に於ける対話の重要性とその意義

我々ロータリアンが自身に向けて何故奉仕をする事が必要なのかと

自問した時どう答えどう理論化すべきなのか。我々にとって奉仕はそれを為す事に関して苦難と試練と認識すべきなのか。それを乗り越えてまで為すべき奉仕とは何故善き事であり合理的な事であるのか。それは我々ロータリアンのみならず広く一般に理解され得るのであるか。

奉仕をする事は一般的に道徳的である。奉仕の相手方も利益があり奉仕する側も喜びを得られる。従って善い事と考えられる。..\* これらの根底には# 1 相手方を自身の目的を遂行する為の「道具」として用いている。# 2 奉仕は善き事であるから為すべきなのでありそこには目的も条件も整わない。「善意思」は定言命法により為されるのであるから。従ってそう「\*」答えるのはロータリー主義を理解したものであれば明白に理性的考察とは相違すると認識出来るはずである。（詳細はロータリーの正義Ⅰ，Ⅱ参照のこと）

何故苦難と試練を経ても奉仕をする（しなければならない）のか。ここで云う所の「奉仕」とは定言命法を理解し実践する事そのみを云う。その場合その自己のロゴスへの忠実さが問題になるのであるがそれはその人をしてロゴスに忠実（クリトン）たるその人の生その

ものとなる。ロゴスに忠実とは純粹理性そのものでありその対極にあるのが所謂快樂・苦痛・恐怖等の情念である。それらに屈することなく理性に於いて自身を律する事が出来るかが問題なのである。理性も存在の構造によりその無基底性はあらわであるがロゴスが発動する所のその理性を支えそれでも基底にあらうとし理性を理性として存在たらしめているものは何か。それは恐らくその人たる主観・歴史・伝統・因習・風習・神話（宗教含む）そして道德と云った非合理的なものであろう。我々ロータリアンのロゴスの発動は恐らくそこから為されるのである。我々のロゴスは次にその非合理的な部分の解析と合理性（化）への転化を図るのであるが自己存在（主観も含め）の意味はそれが出来ない為そこで合理化は停止する。（ダイモーンの合図：自己無基底性の逆証明）

それ故理性を支える非合理的なものの確実な存在（神の知の絶対性等）を察知すると共に（奉仕を行う等の）理性的な行動・思考に於けるその最終的な意味と意義はダイモーンの合図（人間の知の限界性を神の知との対比）により遡行不可能となるのである。またそうした批判的理性の考察には始原（エンドクサ）としての道德的信念（主観）があるがその信念に於いても普遍化・客観化は極めて困難である。何

故なら哲学的ロゴスの無基底性並びに推論・合意の特殊性(場の限定)が立ちはだかるからである。哲学的合理性はこの様に自らの自律性を認めず自らを神話とは昇華させないのである。

哲学的ロゴス(ソクラテス等)はイオニア自然哲学とは神の神格と云う点に於いて相違する。神を絶対的に道徳的存在とする事で神話的であり且つ哲学的合理性に適合させ得たのである。(超自然的存在のまま)徳が知識である。また神の啓示をも批判的理性の中でのみ受容すると云う見解-即ち純粹理性によってのみ理解される。ただしこれは神の啓示の合理性その全てを人間が理解できるという意味は含まない。神の知と人間の知の絶対的な対比は保持される。神の啓示が絶対的な真理を含むと云う前提そのもの並びに神をその様な存在とみなす時点で既に信仰(宗教的)なのである。(クリトン 46B)

哲学的ロゴスの無基底性の相対化並びにその克服に関しては①ヘラクレイトス哲学(存在の構造:ロゴス・ポレモス思想)・②ソクラテス哲学(論駁)・③プラトン(哲学的ロゴス-対話:仮設-イデア論)の存在理解に於いて基本的に一致している。

① 事物の存在とその同一性は絶えざる自己更新と自閉(非在)への傾向性との不断のたたかいによってのみ保たれる。(プラトン饗宴で

も同一理解である) 即ち対立事項のたたかいと云う不断の動の中でのみ存立が可能である。この存在の構造が万物の構造に通底する。同様に他者との関係でも自己は他者との相関項でのみ存在する。この二重の相補関係を「反対物の一致」と云う。その対立と云う「たたかい」で利害関心の固着で自閉化する(私的思慮に埋没する・アトミズム)のは「共通的なもの」(ロゴス)に従っていないからである。

②知らぬのに知っていると思ひ込む無知-自閉化..対「無知の知」

③ 自己更新と云う存在の構造そのものが思惟する事・ロゴスそのものである。ドクサ(主観)と云う思ひ込みから脱却し対話を通じて共通的なものを知る。(共在:人間存在)・(存在の構造:饗宴)

いずれにせよ「たたかい-対話」に於いてもそれ自身の形骸化は避けられない。新たな関心の共有・惹起とロゴスの適正化(道具的理性の脱却)そして社会的な役割と役割としての関係を越えた実存的交わりが人間には必要であろう。しかし自身の問題として限りなき自己への執着がある。それは時代にかかわらず役割と云う殻・道徳と云う形式・合理的制度支配による外壁等のやすらぎ(自己更新無きアトミズム)を欲するからである。即ち非在への傾向性に贖いきれないのである。その事が又我々を社会的な役割へと還元するにも拘わらず

である。他方では何時の時代でもどの様な社会制度下でも存在する制度支配（官僚支配・専門技術知支配等）がある。これらは結局の所人間の実存的関係より役割と役割としての関係を重視する。所謂人間のアトミズム化の促進である。この様な功利主義的徳が蔓延る近代では対話による同意など全く期待されない問題が山積する。更にシュプレヒコールを繰り返す感情論が対を成して表出すればする程対話の無意味さ（虚しさ）を痛感し結果自閉し自己不透明のアトミズムへと漂流するのである。即ち言論と主張そのものが逆に対話の可能性を無きものへとしているのである。これが「共通的なもの」に従おうとしている魂が感じる所の「語る事の無意味さ」である。（言論嫌い：プラトン）

この様な現近代社会に於いて我々ロータリアンは民主主義と資本主義の担保（もう一つあるが）と云う業を背負いながら尚且つ価値創造的な対話を目指さねばならないのである。制度支配に対抗し対話の復権を目指す。その為には実存的関係に於ける関心の共有を図り特殊な利害関係に固執する事無く理性を道具として用いない事が必要であろう。そうすれば理性は本来の表現の姿を取り戻すのである。実存的関係を昇り詰める所のシュヌーシア（対話）を目指して。

(パイドロス 244A-257A,274B-277A,341B-D)

この様な理性的対話とは新たに価値を創造すると云うお互いの自己更新による「たたかい」即ち「論駁」「イデア論」と同じである所の生命と存在の構造そのものなのである。(非アトミズム論理解釈)

これが本稿の結論である。

ロータリー主義の解釈と本質的理解にはこれらの習得が必要である。本来我々ロータリアンの先達は「新思想運動集団」としてその形態を整え理論の実践と検証を行ってきた。

幾多の変遷を経て現在に至っているのであるが基本理念の形式化・形骸化と共に奉仕行動の目的論の不透明さ並びに基本理念とかけ離れた言表や文献が巷間溢れてきている。

その多くの原因が本質の無理解とそれを習得しようとする能動的な行為が為されていない事に起因すると考えざるを得ないのである。

あとがき

現代はナショナリズムとポピュリズムの時代と云われる。それに加

えて（それ故に）潜在的に寡黙であった人種的並びに宗教的論争まで顕在化する様相を呈している。市民生活の中では自由と権威の相克が一層加速しそれ故（それに対する不満も相加相乗し）お互いに対して不寛容な社会的状況を作り出している。権利の過剰な主張が為されるべき義務を上回るのが当たり前とされ声高な言論と数値化と制度化された功利主義的道徳に幾ばくかの疑問すらも抱かない。

ロータリー主義は何時の時代も善意思による自己更新とその結実としての奉仕を行ってきた。その事は何時の時代に於いてもどの様な社会状況でも一筋の光明たろうとしてきたからではなかったのか。果たして現在我々はその姿勢を保持しているのだろうか。

もしそうであれば本書（Ⅰ-Ⅲ）の刊行は不要であったはずである。

本書を美奈に捧ぐ

平成 29 年 2 月 28 日

東広島 RC

田渕 水作夫

## References

- 1) プラトン全集 (1) エウテュプロン ソクラテスの弁明

クリトン パイドン

- (2) クラテュロス・テアイテトス
- (3) ソピステス ポリティコス (政治家)
- (4) パルメニデス ピレボス
- (5) 饗宴 パイドロス
- (6) アルキビアデス I・II ヒッパルコス

恋敵

- (7) テアゲス・カルミデス・ラケス・リュシス
- (8) エウテュデモス・プロタゴラス
- (9) ゴルギアス・メノン
- (10) ヒッピス (大) ヒッピス (小)

イオン・メネクセノス

- (11) クレイトポン・国家
- (12) ティマイオス・クリティアス
- (13) ミノス・法律
- (14) エピノミス (法律後編)

第七書簡-第八書簡

- (15) 定義集 正しさについて 徳について

デモドコス シシュポス アクシオコス

エリュクシアス

田中美知太郎 鈴木照雄他 訳 岩波 1974-1976年

2) パイドン

岩田靖夫 訳 岩波 1998年

3) 饗宴

久保勉 訳 岩波（文庫） 2008年

4) パイドロス

藤沢令夫 訳 岩波（文庫） 1967年

5) テアイテトス

田中美知太郎 訳 岩波 1938年

6) 国家（上）・（下）

藤沢令夫 訳 岩波 1979年

以上 トラシュロス版 「プラトン全集の枠組み」にて考察

本文の一部にステファヌス数（頁付け: Stephanus pagination）使用

オクスフォード古典叢書(OCT) : Platon Opera series:バーネット版

に関しては著者参照のみ使用 (John Burnet: Oxford Classical texts)

7) ロータリー文庫 PDF ファイル

8) H.-G. Gadamer, Logos and Ergon in Plato's Lysis ,Dialogue  
and

Dialectic,translated by P.C. Smith, 1980

9) ヘラクレイトス

広島大学 高橋憲雄 晃洋書房 1995年

10) 自由と権威の相克

広島大学 高橋憲雄 晃洋書房 1992年

(本書の複写 複製 転載には著者の許諾を必要とします)